

亀岡市立亀岡小学校 さくら学級

講師：八木良太

2022年10月24日（月）校庭の音をきく

11月7日（月）集めた音で楽譜をつくる

11月14日（月）声を録音する

11月21日（月）丸いアクリルを染める

11月28日（月）染めたアクリルを並べて写真に撮る

場所 亀岡小学校内 教室

参加 さくら学級の生徒45名

今年度、亀岡小学校の特別支援学級・さくら学級で、初めて学外からアーティストが講師として招かれた。八木良太を講師に迎え、二学期に「生活単元」という授業の中で全5回行われたワークショップでは、「さくら」をテーマに、音、声、色などを使った多様なアプローチで表現が試みられた。



インタビュー：八木良太（アーティスト）
鷹羽圭介・横井土紀子（亀岡小学校）
聞き手：奥山理子・阪本結（みずのき美術館）

写真作品について

鷹羽：授業の時に撮った子もいるんですけど、どっちかというところとじっくり撮り直した子の方が多いかもしれないですね。

横井：そうやんな。各クラスでね。

鷹羽：子どもによってこだわりの角度があったりカットの仕方が違ったりして。

横井：6年生とか、自分で納得いくまで何回かやってた。

鷹羽：そう、高学年の子はようこだわってやっていましたね。タイトルもつけてみました。それぞれ。

奥山：これは、子どもたちが自分でつけた？

鷹羽：はい、「どんながいい？」って尋ねてみました。「無題」となっているものもあります。

阪本：作って、写真撮るところまで全部生徒さんがやってるんですか？

横井：写真撮るのも子どもがやっています。自分のタブレットで。

八木：すごい斜めから（笑）この魚とかね、いい感じ。

鷹羽：ちゃんと（色の配置が）対応してるんやな。緑が真ん中に入ってる。こだわりを感じますね。

音楽作品について

鷹羽：あと音楽、音を拾ってきた作品もあります。
♪（鳥の鳴き声が入っている音源を聴きながら）

八木：ああ良いな。楽譜とそれに対応する音源が揃っているやつは壁面に展示して、ゆっくり照らして。ランダムの方がおもしろいのかもかもしれないですけど。

鷹羽：すでにかっこいいですね

横井：楽しい。それこそ動きがあってフッと「どこいくんだろう？」っていうワクワク感もある。

八木：それがやってみたい展示の一つの案です。でも音源だけでも結構いい感じですね。

鷹羽：こういう音源が拾えてるんですよ、みんなしっかりと。歩いている音とかね。

横井：足元の砂利を踏んでジャリジャリした音を録ってた子もいたね。

学内の反応

奥山：今回、鷹羽先生や横井先生の他に立ち会っていただいた先生方はどんな反応でしたか？

鷹羽：楽しかったと、前向きな感想が多いです。例えば、みずのきさんややまなみ工房さんに代表されるような国内外で知られた障害のある人のアート、みたいなことにはそれほど関心を持っていなかったり、詳しく知らないと思うんです。ただ子どもの取り組みとしてはすごく楽しかったし、いつもと違う表情が見れたという話もよくするし。それに、その先生たちが（ワークショップの）写真を見て「わあきれい！」とか言ってくれることも多かったんですよ

かったかなと思います。たまたまみずのき美術館が近くにあったから一緒にさせてもらったんだだけじゃなくて、特別支援とすごい親和性があるんじゃないのかなと思います。ただ、こうした感じ方は教員全員でなかなか共有できるわけではないので。社会のアートへの関心とか、亀岡の中からも動き始めている気運を全職員が知っていれば、もっとこの動きは大きくなるし、もっと巻き込めるかなって思っています。ほんまに全然知らはらへん先生もおられると思うので、ここからちょっとずつ。

八木：それでいいんじゃないかな。子どもたちが最初、美術館って喋ったらいけないところだと思ってたって言ってたように、色んな誤解があったりするのを徐々に解いていくには、やっぱり何年もかけて徐々にやっていくしかないの。かめおか霧の芸術祭だって、ようやく今、5年目くらいでしたっけ？

奥山：そうです。時間がかかっています。「いわゆるアート」っていうのを崩すために5年続けているみたいな感じなので。

八木：でもそれでもまだまだ。

奥山：まだまだです。なので、今回のようなことをコツコツやるのが一番大事だったりします。

八木：派手じゃないかもしれないけど。(笑)

横井：創作活動ってシンプルに楽しいじゃないですか。子どもたちって一方的に教えられるのは嫌やけど、作るのが嫌やっていう子はあまりいないと思うし。それを子どもたちはまだ「アート」って思っへんと思うんやけど。「生活単元」っていう学習は、私たちが子どもたちの実態をふまえて合科としてオリジナルで作れるから。それは特別支援の良いところであって。どうせなら楽しいものにしたいし、子どもたちがその時間を楽しみにしてくれるような授業にしたい。そのためには、やっぱり少し新しい風が欲しい。それに地域の人たちとも繋がりたい。特別支援の学級って、小集団で関係が近く、濃くなる。普段、この子らの将来を考えた時に何ができるとか話し合っていると、楽しい話もあるけど、心配なことがいっぱいある。でも子どもたちの中で、小学校時代に楽しいと感じられる経験があって、それが少しでもどこか記憶に残ってくれて、大きくなっていく過程で「何かしたいな」とか、「どんな人がいるんだろうな」、「自分の地域ってどんなだろうな」って興味を持ってくれるようなちょっとした



きっかけになってくれる……。私はね、「生活単元」がそんな学習であって欲しいなっていう願いがある。大きく言えば自立につながってくれば嬉しい。大きく言えば、ですよ。

奥山：いいですね。生活単元。もうアートの授業ですって言わずに、ずっと「生活単元」って言うべきでしょう。その方がいいと思う。私たちが目指す「アート」のあり方により馴染む。全ての生活の土台にアートはある。そういう意味では生活単元っていうのは新鮮ですね。

横井：だから、(最初の授業が)音楽でよかったなと思って。絵を描くとか、作るのかももちろん良いんだけど。あ、音っていうのもアリなんや！っていうのがすごい新しい感覚だった。

奥：授業の中で一度も「上手に絵を描きましょう」がないですもんね。笑

横：そうそうそう。

八：そんなにね、必要なことではなかった。



今後の展開

八木：協力させていただくことは何なりとって感じではあるんですけど、作家が変わっていくのも面白いかなという気もして。亀岡にはたくさん作家もいるし。

奥山：それを考えるためにも、まずは八木さんが。

八木：そうそう。近所やし、って。

得意な分野ってみんなバラバラやと思うので、僕は音とか得意な方ではあるんですけど、写真が得意な作家もいるし、映像が得意な作家もいますね。

内容が毎年アップデートされる方が結構おもしろい
んかなっていう気はするんですけど。

奥山：そんなこともちょっと思ったりしています。

八木：案外、子どもが得意じゃなさそうな作家にぶ
つけんのもありかな。

一同：笑

奥山：でも今回は、八木さんを講師として固定でき
たからこそ、「また八木さんが来ます」って流れが
できて、それが子どもたちのスイッチになっていた
ところもあったんだろうなとも思いますね。

横井：それもすごく大事で、やっぱり関係作るのが
苦手な子が多いので、だんだんコミュニケーション
が取れるようになってきた、自分が出せるようにな
ってきたっていうのもあるだろうし。そこらへんの
兼ね合いは、悩むところではあるんですけど。

八木：僕も決して子どもと何かコミュニケーション
するのが得意っていうわけじゃないんですけど、実
際自分の子どもが生まれて、いま下の子はサンガス
タジアムにある保育園に通っていて、園長先生の奥
さんが絵描きさんなんですよ。園長先生も、きっと
アートとかそういうの好きな方だと思うんですけど、
こないだ迎えに行ったら「なんかちょっとやって欲
しいんですけど」みたいなこと言われて。笑 さらに、
言葉の通じない園児さんたちにどうやって、
っていうのが。

横井：年齢がね。

八木：いつも、なんか、そういう自分の思いがけな
いところから話が飛んでくるんです。笑

